

産業遺産、世界遺産への道

種田 明

Industrial Heritage, Road to the World Heritage List

Akira OITA

要旨：1950年代半ばに誕生した産業考古学は、学の対象を産業遺産として、1970年代には国際的な広がりをもつ組織（TICCIH）へと展開していった。バブル経済崩壊後の環境保護と文化交流（心の豊かさ）を求める時勢の中、わが国では世界遺産条約が批准された（1992年）。産業遺産をめぐるのは同時期（1990年代）に、TICCIHとICOMOS/UNESCOは連携関係を深めていった。

1994年、3つのカテゴリー〔20世紀建築、産業遺産、文化的景観〕が、世界遺産の内容的・地域的な偏りを是正するための、UNESCOのグローバル戦略^{ストラテジー}として世界遺産リスト登録サイトに加えられることになった。

いったい世界遺産の中に「産業遺産」はどこ（国や地域）で、どの産業（分野）が、何を基準（文化遺産）として登録されているか。1999年、最初に世界遺産の中の産業遺産一覧を示したのはH・クレール〔Henry Cleere〕であった。（1998年末：21件）次いで2008年、清水慶一の世界遺産・産業遺産のリストが示され（2007年末：50件）、「産業遺産」の国内外での認知・普及はさらに進展した。そして2011年にはUNESCO-ICOMOSにより「世界遺産リストの中の技術・産業遺産」（51件）が公示されるに至っている。

世界遺産の登録数が1000件を超えた（2014年に1007件）今日、産業遺産が世界遺産リストに登録される道筋はどうであったか。最後に私案のリストを提示し、特性・要件・産業分野から104件を選定した（2016年）。世界遺産・産業遺産には「顕著な普遍的価値（OUV）」だけでなく、「地域／民族（あるいは個人）の文化（あるいは独創性）」と「（産業）システム」の評価が求められていると考えている。

キーワード：世界遺産、産業遺産、産業考古学、ICOMOS、TICCIH、地域／産業文化

序

世界遺産のリスト登録数は、登録初回1978年の12件から2014年には1007件と、ついに4桁にまで到達した。産業遺産は、このような世界遺産登録数増の道程の中でどのような位置づけと変遷をたどったのであろうか。

本稿は、産業遺産を研究対象とする産業考古学の、その誕生からの軌跡をたどる。そして現在までの筆者（種田）私案“世界遺産になった産業遺産リスト”（一覧表）を提示し、「世界遺産の中の産業遺産」とはいったい何かを、登録された構成資産内容を探る中から抽出しようと試みたものである。

1. 産業考古学と TICCIH（国際産業遺産保存委員会：国際 NGO）

1950年代に、学際的な研究分野かつ保存と利活用をめざす実践的学問領域として英国に誕生した産業考古学は、当初は「産業革命（the Industrial Revolution）」の遺産（legacy）・財産／文化財（property）を研究・保存の対象としていた。

1950年代は、戦後の経済社会の急速な復興期であり、英国各地で産業革命期の貴重な産業記念物が次々解体・廃棄され失われていた。産業遺産は1970年代末まで、「産業遺産」ではなく、「産業（あるいは）技術記念物」、「産業遺跡・遺物・遺構」と呼称されていた。ユーストン駅（Philip Hardwick 設計・1837年開業）の解体・建て替えもそのスクラップ&ビルドの一つであったが、ランドマークになっていた“ユーストン・アーク”（Fig. 1）を保存しようという国民

的運動が、誕生したばかりの産業考古学を巻きこんで展開された。

生まれたばかりの「産業考古学」に‘保存’への推進力はなかったが、保存運動の展開過程でこの新しい学際的学問領域の社会的認知度は上昇し、国際的な「文化財の研究・保存・(再)利活用」に欠かせない分野であることが注目されるようになったのである。イギリス産業考古学協会(AIA=Association for Industrial Archaeology)は、1964年に先行して機関誌『産業考古学レビュー』刊行を開始、1976年に正式に創立した。

TICCIHの前身は、創設したばかりの「アイアンブリッジ峡谷博物館」初代館長(1971~83)N・コソズ(Neil Cossons, Sir 1939~)と学芸員(のち同館副館長・館長)S・スミス(Stuart B. Smith, 1944~2014)が中心となって

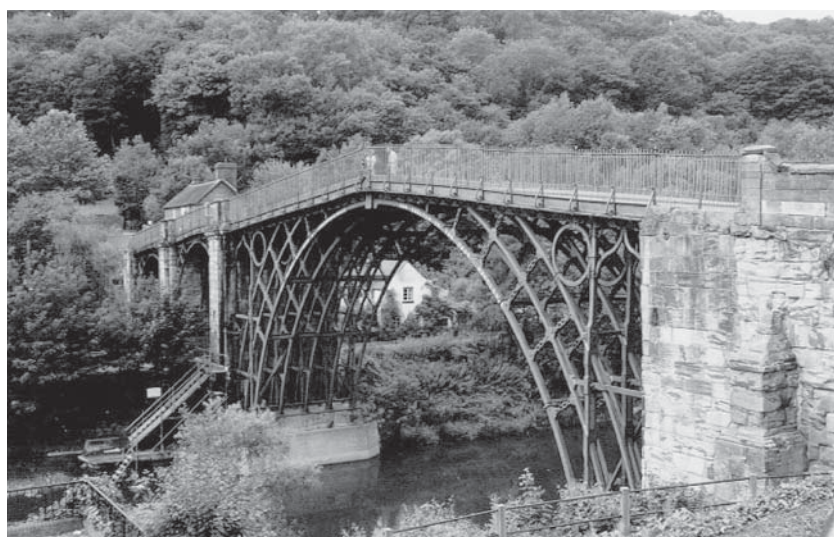
Fig.1 ユーストン駅のアーケ(1851年頃の絵)



ENTRANCE TO THE LONDON & BIRMINGHAM RAILWAY STATION, Euston Square, London.

出所：ウィキペディア「ユーストン駅」(<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%A6%E3%83%BC%E3%82%B9%E3%83%88%E3%83%B3%E9%A7%85> (2016.09.20検索))
高さ72フィート(≒22m)のドーリア式門柱建築物、1962年に解体撤去された。

Fig.2 アイアンブリッジ峡谷(世界初の铸铁橋、1986年世界遺産リスト登録)



出所：石田正治「海外産業博物館 NO.1 アイアンブリッジ峡谷博物館」
http://www.tcp-ip.or.jp/~ishida96/museum/95eu-01_Iron_Bridge.htm (2016.09.19. 検索)
Ironbridge Gorge Museum Trust: トラストは1968年設立、現在は1970年に併合した Coalbrookdale Museum of Iron (1959年設立)を含む博物館10館と産業革命の歴史サイト35(カ所)を管轄運営している。

呼びかけ、1973年に同館で開催された「第1回国際産業記念物保存会議（FICCIM = The First International Conference on the Conservation of Industrial Monuments）」である。

コソズらの呼びかけで参集した第1回の9カ国61人から、第16回本会議（2015年フランス／リール：本会議／総会ほぼ3年おきに開催）では30を超える国500人超の参加者を数えるまでになっている⁽¹⁾。1975年に西ドイツ／ポッフムで開催された第2回会議（SICCIM）と1978年にスウェーデン・ストックホルム＋グランゲルデで開催された第3回会議（TICCIM）を経て、「産業記念物（Industrial Monument）」は「産業遺産（Industrial Heritage）」に改称され、今日の TICCIH となったのである⁽²⁾。

産業革命の遺産を対象として始まった産業考古学は、1970年代2度の石油ショック（エネルギー問題）を経て人びとの関心が地球環境問題へと向うなかで、“過去の世代から受け継いだ価値あること・モノを保存・（再）利活用し、次世代へ引き継ぐ（=inherit）こと・モノ（=heritage）”へと、すなわち「産業遺産」を対象とする科学へと発展していった。

Tab. 1 世界遺産／産業遺産関連 略年表⁽³⁾（作表・種田2016）

1945	・国際連合教育科学文化機関（UNESCO：本部パリ、日本加盟1951）創設
1946	・国際博物館会議（ICOM：国際 NGO）が設立—UNESCO と協力関係
1948	・国際自然保護連合（IUCN：国際 NGO）が発足
1954	・ハーグ条約（武力紛争の際の文化財の保護のための条約）採択
1955	・“産業考古学”最初の論文 Michael Rix, 'Industrial Archaeology' in: <i>The AMATEUR HISTORIAN</i> , Vol. 2 No. 8/October-November, 1955
1959	・ユネスコ「アブ・シンベル神殿保護救済キャンペーン」開始 ・文化財の保存および修復の研究のための国際センター（ICCROM：本部ローマ）発足
1965	・国際記念物遺跡会議（ICOMOS：国際 NGO）が発足
1968	・アイアンブリッジ峡谷博物館トラスト設立（Fig. 2）
1970	・ユネスコ条約（文化財の不法輸出、輸入および所有権譲渡の禁止及び防止の手段に関する条約）採択
1972	・国連人間環境会議「人間環境宣言」（現在および将来の世代のために人間環境を擁護し向上させることは人類にとって至上の目標の一つである）採択 ・世界遺産条約（WHC = World Heritage Convention）、ユネスコ総会で採択（11/16）：IUCN/ICOMOS の調査後、世界遺産委員会（21カ国）が審議・決定
1973	・第1回・国際産業記念物保存会議（FICCIM）[アイアンブリッジ]
1975	・第2回・国際産業記念物保存会議（SICCIM）[ポッフム／西ドイツ（当時）] ・最初の“ヨーロッパ記念物保護年”（イギリス観光庁が提唱） ・WHC 発効／日本の批准は1992年
1978	・WHC による最初の「世界遺産リスト登録」（12件→2016年7月現在1052件） ・第3回・国際産業記念物保存会議（TICCIM）で TICCIH（国際産業遺産保存委員会：国際 NGO）設立。本会議＝総会の序数は TICCIM を踏襲し第3回とする、本会議は原則3年毎に開催等の“規約”制定
1992	・世界遺産センター（WHC = World Heritage Center：世界遺産委員会の事務局）がユネスコ本部内に設立 ・「ユネスコ記憶遺産（Memory of the World：世界の記憶）」登録開始
1994	・3カテゴリー [20世紀建築、産業遺産、文化的景観] 世界遺産登録可能になる（UNESCO「世界遺産リストの代表性、均衡性、信用性のためのグローバルストラテジー」採択）／ICOMOS「真正性」概念整理（Nara Document）
1999／2000	・ICOMOS・TICCIH 共同協定（Collaboration Agreement between ICOMOS and TICCIH）調印／2000年の第11回 TICCIH 本会議（UK）で承認・発効
2002	—（第26回）世界遺産委員会開催時期が12月から6月末／7月初めに変更—
2003	・「無形文化遺産の保護に関する条約」採択（第32回ユネスコ総会） ※1984～：USA は UNESCO を脱会：2003に復帰 ・第12回 TICCIH 本会議 [ロシア] で「ニジニー・タジール憲章」 ⁽⁴⁾ 採択
2005	・「世界遺産条約履行のための作業指針（Operational Guideline）」改訂（過去93, 97…）‘文化遺産’（Ci～vi）と‘自然遺産’（Ni～iv）の基準を統一（i～xに） ・TICCIH 中間会議 [名古屋・愛知]：‘愛知万博’に協賛＝アジア初の TICCIH
2007	・世界遺産となった産業遺産（日本初）“石見銀山遺跡とその文化的景観”

2012	・WHC 成立40周年記念式典／会議 [日本／京都] ・第15回 TICCIH 本会議 [台湾] = アジア初の本会議 (台湾は WHC 非加入)
2014	・世界遺産となった産業遺産 (日本 no.2) “富岡製糸場と絹産業遺産群”
2015	・世界遺産となった産業遺産 (日本 no.3) “明治日本の産業革命遺産” ・世界遺産委員会「世界遺産に係るボン宣言」採択：IS を強く糾弾・非難
2016	・第40回世界遺産委員会 [イスタンブール] はクーデター事件のため、7月は本来の委員会 (前半で中断)、後半は10月にパリでと異例の分散開催となった

2. TICCIH と ICOMOS (国際記念物遺跡会議：国際 NGO)

ICOMOS は UNESCO の「文化 (財)」に関する関連組織である。JAPAN ICOMOS/INFORMATION Vol. 8, No. 9 (5 March 2012 日本イコモス国内委員会 [編・刊]) において、ICOMOS については次のように説明されている：

ICOMOS (International Council on Monuments and Sites) は、1964年に採択された「記念物と遺産の保存に関する国際憲章 (通称ヴェネツィア憲章)」を受けて1965年に設立された国際 NGO です。第1回総会は1965年6月にポーランドで開かれました。ユネスコをはじめとする国際機関と密接な関係を保ちながら、文化遺産保存に関する理論、方法論、科学技術の研究・応用、またユネスコの世界遺産条約に関しては、諮問機関として、登録の審査、モニタリングの活動等を行っています。各国の文化遺産保存分野の第一線の専門家や専門団体によって構成されており、2012年10月時点で、参加国は133カ国を数え、会員は12,000人以上にのぼっています。28の国際学術委員会を通じて様々な専門分野、テーマ別の活動が行われており、文化遺産の価値の高揚のための重要な役割を果たしています。(…略…)

TICCIH と ICOMOS は1980年代後半頃から徐々に関係・連携を深化させた。その要因の一つは、ヨーロッパやアメリカの各国 ICOMOS 国内委員会メンバーの30～50% (ハンガリーは90%) が TICCIH のメンバーでもあるところにあった。日本イコモス国内委員会 (1972年第3回イコモス総会／ブダペスト承認、1979年発足) は、会員447名 (2016年6月現在) のうち TICCIH 個人会員はわずか5名に過ぎない。

ICOMOS・TICCIH 双方の調整・仲介に大きな役割を果たしたのは D・ブンバル (Dinu Bumbaru, ICOMOS Canada) と H・クレール (Henry Cleere, Prof. of UCL/ICOMOS UK) の二人であった。ブンバルはバンクーバー生まれでモントリオール在住、ローマとイングランドで建築保存 (architectural conservation) を学び、1982年からカナダ最大の民間組織の一つでもあるヘリテージ・モントリオール (Héritage Montréal) に勤務 (現在は政策担当理事) している。ICOMOS では事務局長 (1993～2002) を勤め、危機地域 (内戦終結直後のドゥブロヴニク／クロアチア、震災後の神戸／日本・バム／イラン) の調査 (ミッション) に参加したほか、宗教遺産・産業遺産・19/20世紀遺産保存に取り組む組織と ICOMOS の間をつなぐ役割を果たしている人物である⁽⁵⁾。

後者クレールは、20年近く歴史考古学 (製鋼業 steel industry で1980年 PhD, 1998年から honorary Prof. of UCL ; 英国考古学協会理事1974～1991) を専門研究領域として歩んだ後に、ヘリテージ・マネジメント (heritage management : 古代から近現代まで) に専攻を転換し、世界遺産 (ICOMOS 世界遺産コーディネーター : 1992～2002) と産業考古学にアプローチしている特殊な経歴を持つ人物である⁽⁶⁾。

英国では「アイアンブリッジ峡谷」がすでに1986年に世界遺産リスト登録されていたが、これと前後する80年代半ばから TICCIH と ICOMOS は連携を強化していた。とくに ICOMOS 会員に産業遺産・産業技術の専門家がほとんどいなかったこと、「産業文化」という概念が広く浸透し始めたこと (文化概念の外延拡大)、TICCIH 会員の多くが ICOMOS 会員でもあったこと、などが作用して「ICOMOS・TICCIH 共同協定」(Fig. 3) 調印となったのである。

産業文化・産業遺産を調査・研究・保存・(再) 利活用していくことに携わっている人びとの勢力拡大 (とくに文化 (財) 概念拡張と世界への波及、人材教育) を図る TICCIH と、グローバル戦略をとる ICOMOS/UNESCO の思惑が一致した象徴が、クレールによって初めて一覧表にされた「世界遺産リストにおける産業遺産」(Fig. 4-1) であった。

Fig.3 ICOMOS・TICCIH 共同協定の表紙（実物は A4版で4p.）

COLLABORATION AGREEMENT BETWEEN ICOMOS AND TICCIH

signed on occasion of the General Assembly of TICCIH
during the TICCIH 2000 Conference in London
(31 August 2000)

ACCORD DE COOPERATION ENTRE ICOMOS ET TICCIH

signé à l'occasion de l'Assemblée Générale de TICCIH
au cours de la Conférence TICCIH 2000 à Londres
(31 août 2000)

[ENGLISH VERSION]

As a result of a series of meetings and consultations which took place in 1999-2000, involving:
-- Dr Jean-Louis LUXEN, Secretary General of ICOMOS, Dr Henry CLEERE, World Heritage Co-ordinator, on one hand;
-- Prof. Louis BERGERON, President of TICCIH, Eusebi CASANELLES i RAHOLA, Executive President of TICCIH, and Stuart B.SMITH, Secretary General of TICCIH, on the other hand,
it appeared that a former agreement between the two parties, while having worked softly and at a mutual satisfaction over the past fifteen years, needed to be written again or updated in some of its parts, according to the experience accumulated during that lapse of time and to the practical aims of their cooperation in progress.

ICOMOS・TICCIH 共同協定は英語版とフランス語版 2 通ある。
ここに H・クレールの名前があり、D・ブンバルの記名はないが、締結に深く関与し1990年代および2000年の TICCIH 本会議には必ず参加していた。(種田の記憶)
L・バルジュラン (故人) はパリ大学教授・TICCIH 会長 (1990~97/2000)、
E・カサネレスは執行会長 (次期会長97/2000~09: 共同協定締結後前者に替わった)・バルセロナ国立科学技術博物館館長 (当時)、
S・スミス (故人) は TICCIH 事務局長 (1986~2012)・トレヴィシツク・トラスト主任管理官 (当時) [1983~1992 アイアンブリッジ峡谷博物館館長] であつた。

Fig. 4-1 世界遺産のなかの産業遺産 (1)
世界遺産リストにおける産業遺産 1998年現在 (ヘンリー・クレール⁽⁶⁾作成)

番号	登録年	遺産名	所属国名(略称)	登録基準	登録要件(タイプ)/備考
C-1	1978	ヴィエリチカ岩塩坑	ポーランド	iv	歴史的塩坑 (中世から現代)
C-2	1980	レーロースの旧鉱山町	ノルウェー	iii, iv, v	銅鉱山町
C-3	1982	アルケ・セナンの王立製塩所	フランス	i, ii, iv	王立専売会社の建築物
C-4	1986	アイアンブリッジ峡谷	英国	i, ii, iv, vi	歴史的産業景観
C-5	1987	ボトシ市街	ボリビア	ii, iv, vi	鉱山業のセンター
C-6	1988	古都グアナファトと近隣の鉱山群	メキシコ	i, ii, iv, vi	鉱業センターと鉱山
C-7	1992	ランメルスベルク鉱山と古都ゴスラー	ドイツ	i, iv	鉱業センターと鉱山
C-8	1993	サカテカス歴史地区	メキシコ	ii, iv, vi	鉱山業のセンター
C-9	1993	バンスカー・シチャウニツアの歴史的都市と近隣の中世鉱山遺構	スロバキア	iv, v	鉱業センターと鉱山
C-10	1993	エンゲルスバーリの製鉄所	スウェーデン	iv	17世紀の製鉄
C-11	1994	フェルクリンゲン製鉄所	ドイツ	ii, iv	19~20世紀の製鉄所
C-12	1995	クレスピ・ダッダ	イタリア	iv, v	19世紀の繊維都市
C-13	1995	クトナー・ホラ歴史都市	チェコ	ii, iv	歴史的鉱山都市
C-14	1996	ミデイ運河	フランス	i, ii, iv, vi	17世紀運河システム
C-15	1996	ヴェルラ碎木・板紙工場	フィンランド	iv	19~20世紀板紙工場
C-16	1997	ザルツカンマーグート地方のハルシュタットとダッハシュタインの文化景観	オーストリア	ii, iii, iv	歴史的鉱業 (塩坑) 地域

C-17	1997	キンデルダイク・エルスハウトの風車群	オランダ	i, ii, iv	歴史的排水・灌水システム
C-18	1997	ラス・メドゥラス	スペイン	i, ii, iii, iv	古代ローマ金鉱山地域
C-19	1998	ゼンメリング鉄道	オーストリア	ii, iv	土木技術
C-20	1998	中央運河閘門ノヴィエールとルルー（エノー州）にある中央運河の4閘門と周辺環境	ベルギー	iii, iv	蒸気力による4つの閘門
C-21	1998	D.F. ウォーダ蒸気水揚げポンプ場	オランダ	i, ii, iv	大規模蒸気ポンプ場

出所：Henry Cleere, 'Putting industry on the World Heritage List', in "TICCIH bulletin" No. 6, Autumn/1999, p. 3 (種田訳+補遺：番号/C-1~21と登録基準を加記)

Fig. 4-2 世界遺産のなかの産業遺産 ((1)の補遺) 2000年8月現在 (2003/Mar. 種田作成)

番号	登録年	遺産名	所属国名(略称)	登録基準	登録要件(タイプ)/備考
+1	1985	ボン・デュ・ガール	フランス	i, iii, iv	古代ローマの水利技術
+2	1985	セゴビア旧市街と水道橋	スペイン	i, iii, iv	ゴシック建築とローマ水道
+3	1995	コルディリェーラの棚田群	フィリッピン	iii, iv, v	山岳地帯の農業と景観
+4	1995	スホランドとその周辺	オランダ	iii, v	20世紀初めの大堤防
+5	1996	ヴァイマルとデッサウのパウハウスとその関連遺産群	ドイツ	ii, iv, vi	20世紀モダンデザイン
+6	1996	アムステルダム防衛線	オランダ	ii, iv, v	19/20世紀転換期の水利技術
+7	1998	リヨンの歴史地区	フランス	ii, iv	中世からの繊維産業都市
(+8)	1999	ダージリン・ヒマラヤ鉄道	インド	ii, iv	土木技術と技術移転

出所：[世界遺産研究センター [編] 『世界遺産データ・ブッカー2000年版』 シンクタンクせとうち総合研究機構 (刊)、2000年等を基に作成]；(カッコ)の意味：+8はクレール氏執筆年には未登録ゆえ除外。(2016/Sept.)

3. 産業遺産から世界遺産へ

国立科学博物館には産業技術史・産業遺産に造詣の深い二人の研究者がいた。一人は故・清水慶一⁽⁷⁾、いま一人は鈴木一義（理工学研究部科学技術史グループグループ長）である。前者の清水が提示した「世界遺産リストにおいて産業遺産と認められる物件」リスト（Fig. 5）は、管見の限りわが国で「世界遺産の中の産業遺産」を一覧表にした最初のものである。

Fig. 5 世界遺産のなかの産業遺産 (2)
世界遺産リストにおいて産業遺産と認められる物件 2007年10月現在 (清水慶一作成)

番号	遺産名	国名	地域	登録年	種類
S-1	ヴィエリチカ岩塩坑	ポーランド共和国	ヨーロッパ	1978	製塩
S-2	レーロース鉱山都市	ノルウェー王国	ヨーロッパ	1980	鉱業
S-3	古都オウロ・ブレト	ブラジル連邦共和国	中南米	1980	鉱業
S-4	アルケ・スナンの王立製塩所	フランス共和国	ヨーロッパ	1982	製塩
S-5	セゴビア旧市街とローマ水道橋	スペイン	ヨーロッパ	1985	水利施設
S-6	ボン・デュ・ガール（ローマの水道橋）	フランス共和国	ヨーロッパ	1985	水利施設
S-7	アイアンブリッジ峡谷	英国	ヨーロッパ	1986	製鉄
S-8	ポトシ市街	ボリビア共和国	中南米	1987	鉱業
S-9	古都グアナフアトとその銀鉱群	メキシコ合衆国	中南米	1988	鉱業
S-10	ランメルスベルク鉱山と古都ゴスラー	ドイツ連邦共和国	ヨーロッパ	1992	鉱業
S-11	エンゲルスベリの製鉄所	スウェーデン王国	ヨーロッパ	1993	製鉄
S-12	バンスカー・シュティアヴニツァ歴史都市と近隣の工業建築物群	スロバキア共和国	ヨーロッパ	1993	鉱業
S-13	サカテカス歴史地区	メキシコ合衆国	中南米	1993	鉱業
S-14	フェルクリンゲン製鉄所	ドイツ連邦共和国	ヨーロッパ	1994	製鉄

産業遺産、世界遺産への道

S-15	クレスピ・ダッタ	イタリア共和国	ヨーロッパ	1995	紡績
S-16	ヴェルラ砕木・板紙工場	フィンランド共和国	ヨーロッパ	1996	製紙
S-17	ミデイ運河	フランス共和国	ヨーロッパ	1996	運河
S-18	ハルシュタット・ダッハシュタイン・ザルツカンマーグートの文化的景観	オーストリア共和国	ヨーロッパ	1997	製塩
S-19	キンデルダイク・エルスハウトの風車群	オランダ王国	ヨーロッパ	1997	水利施設
S-20	ラス・メドゥラス	スペイン	ヨーロッパ	1997	鉱業
S-21	ゼメリング鉄道	オーストリア共和国	ヨーロッパ	1998	鉄道
S-22	Ir.D.F. ヴァウダヘマール (D.F. ヴァウダ蒸気水揚げポンプ場)	オランダ王国	ヨーロッパ	1998	水利施設
S-23	クトナー・ホラ：聖バルバラ教会とセドレツの聖母マリア大聖堂のある歴史都市	チェコ共和国	ヨーロッパ	1998	鉱業
S-24	中央運河にかかる4機の水力式リフトとその周辺のラ・ルヴィエール及びル・ルー (エノー)	ベルギー王国	ヨーロッパ	1998	水利施設
S-25	インドの山岳鉄道群	インド	アジア	1999	鉄道
S-26	ブレナヴォン産業用地	英国	ヨーロッパ	2000	製鉄
S-27	キューバ南東部のコーヒー農園発祥地の景観	キューバ共和国	中南米	2000	食料生産
S-28	青城山と都江堰水利（灌漑）施設	中華人民共和国	アジア	2000	水利施設
S-29	スピエンヌの新石器時代の火打石の鉱山発掘地（モンズ）	ベルギー王国	ヨーロッパ	2000	鉱業
S-30	ダーウエント峡谷の工場群	英国	ヨーロッパ	2001	紡績
S-31	ニュー・ラナーク	英国	ヨーロッパ	2001	紡績
S-32	ソルテア	英国	ヨーロッパ	2001	紡績
S-33	ファールンの大銅山地域	スウェーデン王国	ヨーロッパ	2001	鉱業
S-34	エッセンのツォルフライン炭鉱遺産群	ドイツ連邦共和国	ヨーロッパ	2001	鉱業
S-35	チャトラパティ・シヴァージー・ターミナス駅（旧名ヴィクトリア・ターミナス）	インド	アジア	2004	鉄道
S-36	リバプール - 海商都市	英国	ヨーロッパ	2004	港湾
S-37	王立展示館とカールトン庭園	オーストラリア連邦	オセアニア	2004	現代建築
S-38	ヴァールベリ・ラジオ放送局	スウェーデン王国	ヨーロッパ	2004	通信
S-39	ハンバーストーンとサンタ・ラウラ硝石工場群	チリ共和国	中南米	2005	鉱業
S-40	ブランタン・モレトゥスの家屋・工房・博物館複合体	ベルギー王国	ヨーロッパ	2005	印刷
S-41	コーンウォールとウェストデヴォンの鉱山景観	英国	ヨーロッパ	2006	鉱業
S-42	アフラージュ、オマーンの灌漑システム	オマーン国	アジア	2006	水利施設
S-43	ビスカヤ橋	スペイン	ヨーロッパ	2006	橋
S-44	シーウェル鉱山都市	チリ共和国	中南米	2006	鉱業
S-45	リュウゼツラン景観と古代テキーラ産業施設群	メキシコ合衆国	中南米	2006	食料生産
S-46	アブラヴァシ・ガート	モーリシャス共和国	アフリカ	2006	移民収容施設
S-47	リドー運河	カナダ	北米	2007	運河
S-48	ラヴォー地区の葡萄畑	スイス連邦	ヨーロッパ	2007	食料生産
S-49	石見銀山遺跡とその文化的景観	日本国	アジア	2007	鉱業
S-50	ボルドー、リュヌ港	フランス共和国	ヨーロッパ	2007	港湾

※ ユネスコ世界遺産センターが2002年10月に発表した産業遺産リスト、及びICOMOSが2007年6月に発表した Description of World Heritage Industrial Sites with a Bibliography of Supporting Documents at the ICOMOS Documentation Centre を基に作成。世界遺産の登録内容を吟味し、筆者〔清水〕が作成しています。

出所：『世界遺産年報 2008』（社）日本ユネスコ協会連盟・編、日経ナショナルジオグラフィック、2009、p.19

注記1） 通しの「番号」は「①～⑤0」（原著）を「S-1～S-50」に変更（種田）。S-23は1995が正しい。

注記2） 下線サイト はクレール一覧表（C-1～21+8〔種田・補遺〕）になかったサイト。

S-25（1999年登録）まで、世界遺産の中で産業遺産はわずか4%（1999年世界遺産〔自然・文化・複合〕総数⁽⁸⁾635件のうちの25乃至28（種田補遺を加える）を占めたにすぎなかった。

清水の表 (Fig. 5) は、「石見銀山遺跡とその文化的景観」が産業遺産として日本初、2007年に世界遺産登録されたことを契機に執筆された『世界遺産 年報2008』の“特集 産業遺産” (日本ユネスコ協会連盟 [編] pp. 16~27) に収められている。

清水は、「ニジニータギル憲章」に基づき「人の営みと生業を今に伝える価値ある遺産」 (同上 p. 16) が産業遺産であるとする。そして「2007年10月現在、世界遺産リストに登録された文化遺産660件のうち、産業遺産と考えられる物件は50件と、まだ1割に満たない。」 (同上 p. 18) さらに：

Fig. 6 ニジニー・タギル憲章の扉頁⁽⁴⁾と同じ



出所：TICCIHのHP：<http://ticcih.org/about/charter/> (2012.12.12検索/2016年現在、この表紙は消去され条文のみの掲示になっている)

1978年にポーランドの「ヴィエリチカ岩塩坑」が産業遺産として初めて登録されて以来、しばらくは年1、2件登録されているかどうかだったが、21世紀に入ると登録件数が急速に伸びている。…中略…

しかし、なぜ産業遺産なのだろう。それは恐らく、人が生きていくためにはどこでも何らかの生産活動をしなればならないため、「人の営みや生業の跡」である産業遺産は、およそ人の住むところには必ずあるからだろう。産業遺産を世界遺産リストに取り込むことにより、欧米中心主義から、文化や地域の多様性を取り入れたバランスのよい世界遺産リスト作りに役立てようと考えたのであろう。(同上 p. 18)

「石見銀山遺跡とその文化的景観」が世界遺産リストに登録されたことは、日本の産業遺産が認知されるうえで画期となるであろう。文化遺産には、社寺仏閣や城郭などのほかに、産業遺産というカテゴリーがあることを、日本人は強く認識することになったからだ。(同上 p. 25)

産業遺産は、その地域、地方で人々がどのような生業や営みをしてきたかを目に見える形で残すことができる文化財だ。地域の振興を図るのであれば、産業遺産を残して新しい機能を付加し、活用していくことが必要なのである。…中略… (同上 p. 27)

清水一覧表 (Fig. 5) から3年後 (2011年8月)、UNESCO-ICOMOS Documentation Centre が公示した一覧表⁽⁹⁾は各国別・全54件であり清水とは総数で4件しか変わらない。また2007年の登録までで見ても違いは4件である：清水一覧表にあってUNESCO-ICOMOS リストにないサイトは「アフラージュ、オマーンの灌漑システム/オマーン」「アブラヴァシ・ガート/モーリシャス」「ラヴォー地区の葡萄畑/スイス」「ボルドー、リュヌ港/フランス」である。これは“産業”のとらえ方の違いだけでは説明できない。

わが国では石見に続き、「富岡製糸場と絹産業遺産群」 (2014年)、「明治日本の産業革命遺産 製鉄・製鋼、造船、石炭産業」 (2015年) が世界遺産リストに登録され、日本の産業遺産は世界遺産登録19件中3件 (15%) になった。この機会にあらためて産業遺産/世界遺産を見直し、筆者 (種田・No. も) が作成した一覧表が次表 (Fig. 7)⁽¹⁰⁾である。

Fig. 7 世界遺産となった産業遺産 (2016年7月現在)
産業 (技術/土木) 遺産/世界遺産一覧表初版2008年1月/改訂2011年4月/再訂
2014年9月/現2016年9~10月一種田作成

No.	登録年	遺産名(英語表記の邦訳)	所属国名(略称)	登録基準	備考(特性や要件など: 下線は対象産業)
1	1978	ヴィエリチカ岩塩坑 バッファーゾーン拡張 (08) →ヴィエリチカとポフニヤの王立岩塩坑群 (2013拡大・名称変更)	ポーランド	iv	世界最古の岩塩鉱の一つで今なお採掘している。最盛期(14~16世紀)には財政の1/3を占めた。ポフニヤ坑はヴィエリチカ坑20km東、13世紀に開発始まる。内部に地下都市広がる。
2	1980	レーロース鉱山都市 (2006名称変更) +とその周辺 (2010周辺地域・拡大登録)	ノルウェー	iii, iv, v	1644年銅鉱脈発見開発、1977年閉山。北極圏近くの僻地にできた独特の木造鉱山町である。
3		古都オウロ・プレト	ブラジル	i, iii	オウロ・プレト (黒い黄金) はかつてミナス・ジェライス州の州都 (1823~97)、1693年からのゴールドラッシュで建設された金鉱採掘植民都市 (コロニアル建築バロック様式が残る)
4	1982	アル・ケ・スナン王立製塩所 →天日製塩施設、サラン・レ・バン大製塩所からアル・ケ・スナン王立製塩所まで (2009拡張・改称)	フランス	i, ii, iv	18世紀後半製塩所を中核に建設開始、革命で中断。工場(1779~1895) 他9棟が半円形に現存。王立製塩所にリンクした地上の3棟 (倉庫・汲揚・住居)。
5	1986	アイアンブリッジ峡谷	イギリス	i, ii, iv, vi	A・ダービーⅢが1779年に建造した世界初の鑄鉄橋。産業革命期製鉄業を象徴 (全長60m) する。
6	1987	ポトシ市街 (2014~危機遺産)	ボリビア	ii, iv, vi	1545年発見、16世紀~17世紀半ばまで世界銀の1/2産出。植民地時代の栄華示す建造物現存。
7		ブダペストのドナウ河岸 +「ベスト・アンドラーシ通り」 (2002年拡大登録)	ハンガリー	ii, iv	ベスト地区は商業が発展、シャンゼリゼ通りを模したアンドラーシ通りを敷設 (1872) し、通りに欧州大陸初の地下鉄 (1896) を開通した。
8	1988	古都グアナファトと近隣鉱山群	メキシコ	i, ii, iv, vi	スペイン人が1548年発見、17~18世紀世界銀の20%を産出した。メキシコ屈指の鉱山町となった。
9		トリニダとロス・インヘニオス渓谷	キューバ	iv, v	かつて砂糖産業で栄えた町 (トリニダ) には19世紀の建造物が点在。経済活動の基盤はロス・インヘニオス渓谷で、広大な「サトウキビプランテーション」と多数の工場 (残存) があり黒人奴隷により生産されていた。 〔「世界遺産基本情報」 https://worldheritagesite.xyz/trinidad/ (2016.10.01検索)〕
10	1992	ランメルスベルク鉱山と古都ゴスラー (バッファーゾーン拡張 2008) +とオーバーハルツ水利管理システム (2010追加登録)	ドイツ	i, ii, iii, iv	10世紀後半から神聖ローマ帝国の重要な銀鉱山 (1988年閉山現在博物館) と近傍の帝国都市。
11	1993	サカテカス歴史地区	メキシコ	ii, iv	16世紀半ば~20世紀まで銀鉱山都市として繁栄したメキシコ中央高原 (標高2400m) 北縁の町。
12		バンスカー・シュティリアヴニツァの歴史都市と近隣の技術記念物群 (2006名称変更)	スロバキア	iv, v	12世紀半ばから金銀鉱山都市。17~18世紀栄え以後衰退。鉱山技師養成学校は全欧に知られる。 the Technical Monuments in its Vicinity (工業建築物群: 日本ユネスコ協会連盟の訳)
13		エンゲルスバーリの製鉄所	スウェーデン	iv	16世紀初ドイツから鍛冶職人招き開設。1681年溶鉱炉導入し世界一の製鉄所に; 1919年閉鎖。
14	1994	フェルクリンゲン製鉄所	ドイツ	ii, iv	1873年開所1986年操業停止。ビスマルク鉄血政策を支え新技術多数開発した有数の製鉄所。
15	1995	クレスピ・ダッダ	イタリア	iv, v	19/20世紀にクレスピ家がアッダ川沿いに建設した、理想の労働環境を備えた産業集落 (綿業)。
16		クトナー・ホラ: 聖バルバラ教会とセドレッツの聖母マリア大聖堂のある歴史都市	チェコ	ii, iv	13世紀後半から数百年銀 (産出) で栄えた。石の家・バルバラ聖堂・貨幣鑄造所 (現市庁舎) 等が現存。

17		フィリピン・コルディレラの棚田 (2001～2012年危機遺産、2013年登録リストに復帰)	フィリピン	iii, iv, v	少数民族イフガオ族が2000年護ってきた標高1000～2000m、バナウエ谷の斜面にある <u>ライステラス</u> 。 —危機の原因は主に3つ：*後継者不足と棚田放棄、*畑へ転換で景観維持に影響、*管理計画不備
18		スホクランドとその周辺	オランダ	iii, v	1920～30年代鳥の水没を防ぐ全長30kmの大堤防工事で、 <u>広大干拓地</u> とアイセル湖を造成。
19	1996	ミディ運河	フランス	i, ii, iv, vi	当時最高の土木技術により1681年完成したガロンヌ川 ↔ トゥールーズ ↔ 地中海を結ぶ <u>運河</u> 。
20		ヴェルラ砕木・板紙工場	フィンランド	iv	1872年操業開始～1964年停止の、基幹産業（製紙業）の遺産、現存建屋7棟は1890年代のもの。
21		ヴァイマールとデッサウのパウハウスとその関連遺産群	ドイツ	ii, iv, vi	W・グロピウス設立（1919）の工芸学校は <u>造形デザイン</u> を多数産業と結ぶが、ナチス弾圧で閉校。
22	1997	ハルシュタットとダッハシュタイン、ザルツカンマーゲート地方の文化的景観	オーストリア	iii, iv	ハルシュタット（ケルト語：塩の町）は紀元前10世紀頃から塩の交易で栄え、18世紀ハプスブルク家が <u>塩鉱経営</u> 。
23		キンデルダイク・エルスハウトの風車群	オランダ	i, ii, iv	南部水郷地帯（キンデルダイク）に1740年代建造の <u>風車</u> 19基（うち17基人が住み稼動可能）残る。
24		ラス・メドゥラス	スペイン	i, ii, iii, iv	古代ローマ人が <u>金鉱採掘</u> （BC 1～AD 3世紀頃）残土が堆積した奇観（100m超小山が20km ² に）。
25		ガゼルタの18世紀の王宮と公園、ヴァンヴィテッリの水道橋とサン・レウチョの邸宅群	イタリア	i, ii, iii, iv	18世紀ナポリ王（ブルボン家）カルロ3世がガゼルタ（地名）に建設した王宮（劇場、礼拝堂、博物館ほか部屋数1200）と120haの庭園（中央の3km直線道）は周囲の森林と併せて芸術作品のよう。庭園の水供給にヴァンヴィテッリ（建築家）は古代ローマ風水道橋を、サン・レウチョ（地名）には離宮・邸宅や高級絹布生産の工場（ <u>industrial complex</u> ）が建設された
（「イタリア政府観光局公式サイト」の「世界遺産を巡る」の該当箇所 http://visitaly.jp/unesco/reggia-di-caserta-il-parco-lacquedotto-vanvitelli-e-il-complesso-di-san-leucio （2016.10.01検索））					
25	1998	ゼンメリング鉄道	オーストリア	ii, iv	標高約1000mの峠越え工期6年で1854年に開通した初のアルプス <u>山岳鉄道</u> （41.8km：現役）。
26		中央運河4機の閘門とその周辺、ラ・ルヴィエールとル・ルー地域（エノー）	ベルギー	iii, iv	<u>運河</u> の一部（約7km・高低差67m）を4つの閘門（1882～1917製）でつなぐ水工学技術の頂点。
27		Ir. D. F. ヴァウダヘマール（D. F. ヴァウダ蒸気水揚げポンプ場）	オランダ	i, ii, iv	建築技師ヴァウダによる排水用蒸気水揚げポンプ場（1920）は当時世界最大最新で、現在なお稼働中。
28		リヨンの歴史地区	フランス	ii, iv	15世紀に導入された絹織物業が発展し、17世紀に欧州最大、出版業も栄えルネサンス文化を支えた。
29	1999	インドの山岳鉄道群（「ダージリン・ヒマラヤ鉄道」を拡大2005）（登録内容変更：追加2008）	インド	ii, iv	紅茶産地の山岳鉄道（ダージリン・ヒマラヤ1881建設全長88kmとニルギリ（1891～）1908竣工全長46km）。カルカ・シムラ鉄道（1903完成96.6km／標高カルカ656m →シムラ2075m：英高官を避暑地へ；橋988トンネル107）
30		スクルの文化的景観	ナイジェリア	iii, v, vi	農業と製鉄業を生業とするスクル（小部族）の花崗岩の壁に囲まれた集落：広さ約7.6km ² 、17世紀～20世紀初めの、首長宮殿跡を中心に溶鉱炉・穀物倉庫・祭祀の施設の遺構が残る。現在も約1万5千人が暮す。 （「世界遺産基本情報」 https://worldheritagesite.xyz/sukur/ （2016.10.01検索））
31		ビニャーレス溪谷	キューバ	iv	スペイン統治時代からの伝統的タバコ生産地であり、かつての製法や農法を現在も続けている。自然と調和した独自の生活体系、居住家屋を含めた文化的景観が評価された。 （「世界遺産基本情報」 https://worldheritagesite.xyz/vinales/ （2016.10.01検索））
32	2000	ブレナヴォンの産業景観	イギリス	iii, iv	南ウェールズ古代ローマ時代からの産鉄地は、18/19世紀近隣炭鉱と共に発展世界屈指の <u>製鉄所</u> へ。
33		エーランド島南部の農業景観	スウェーデン	iv, v	新石器時代から5000年間の農業の営み示す景観：ヴァイキング集落、16～18世紀の風車を含む。

産業遺産、世界遺産への道

34		建築家ヴィクトール・オルタによる主な邸宅群（ブリュッセル）	ベルギー	i, ii, iv	1900年前後に設計建設のタッセル邸・ソルヴェイ邸・自邸等は、 <u>アール・ヌーヴォー様式</u> ／ <u>鉄・ガラス多用</u> で革新的。
35		青城山と都江堰水利（灌漑）施設	中国	ii, iv, vi	紀元前250年頃完成し現代も機能している <u>灌漑施設</u> 。都江堰により安定的農業生産で大穀倉地帯へ。
36		キューバ南東部のコーヒー農園発祥地の景観	キューバ	iii, iv	18世紀に導入、19世紀に森林を切開いて大規模コーヒー農園造成。初期のアフリカ奴隷農園形態残る。
37	2001	ゴイアスの歴史的な中心市街地	ブラジル	ii, iv	18世紀初め金鉱発見で標高520mに建設された都市。現地伝統技術資材によるコロニアル建築現存。
38		エッセンのツォルフェライン炭鉱産業複合体	ドイツ	ii, iii	19世紀半ば中小炭鉱群合併で成立、20世紀初頭世界最大採炭量、1986操業停止し史跡博物館。
39		ファルンの大銅山鉱業地域	スウェーデン	ii, iii, v	採掘は8／9世紀、17世紀後半世界産銅量の2／3近代化を支え1992操業停止。施設は保全・公開。
40		ダーヴェント渓谷の水車工場群	イギリス	ii, iv	1783年クロムフォードでR・アークライトが稼動した紡績工場（初の工場制機械工業）や運河・集合住宅等。
41		ソルティア	イギリス	ii, iv	19世紀初頭事業家T・ソルトがブラッドフォード（毛織物業）の北に建設した温情主義的理想産業集落。
42		ニュー・ラナーク	イギリス	ii, iv, vi	19世紀初頭社会主義者・社会運動家R・オーウェンが建設した人道主義的理想の産業集落（綿紡績）。
43		アルト・ドウロのワイン生産地域	ポルトガル	iii, iv, v	登録範囲約250km ² の、世界的に有名なポルトワイン生産地。ドウロ河口のポルトでワインに加工輸出。
44		ブルノのツゲンドハット邸	チェコ	ii, iv	モラヴィア地方経済文化の中心地に残る両大戦間期モダニズム建築中の代表（M・ファン・デル・ローエ設計）。
45	2002	ヴァル・ディ・ノートの後期バロック様式の町々	イタリア（シチリア島南東部）	i, ii, iv, v	大地震（1693）で壊滅的被害のカルタジローネ、カターニャ、ラグーザなど8町は都市計画の下に町並みを再建。
46		トカイワイン地域の歴史文化的景観	ハンガリー	iii, v	ボドロク川沿い40数kmの丘陵は1000年以上続く世界三大ワインであるトカイワイン（17世紀～）生産地。
47	2003	バルパライソ海港都市の歴史的街並み	チリ	iii	16世紀半ばからスペイン人がサンティアゴの <u>外港</u> に整備。鉄道駅舎・関税事務所・傾斜式エレベーター。
48		テル・アヴィブのホワイト・シティ（白の都市）—近代化運動	イスラエル	ii, iv	テル・アヴィブ（1909誕生）の一面に1930年代初頭～1948年まで近代建築運動で建設された白亜の町。
49		ウベダとバエーサのルネサンス様式の記念碑的建造物群	スペイン	ii, iv	レコンキスタ（13世紀）で復帰の双子都市は16世紀以降繁栄、人文主義理念の建築物（町づくり）で高評価。
50	2004	チャトラパティ・シヴァージー・ターミナス駅（旧名ヴィクトリア・ターミナス）	インド	ii, iv	1878年から10年で建造の旧ヴィクトリア駅（F. W. ステイヴンス設計）はゴシックと伝統様式を融合の傑作駅舎。
51		リヴァプール海商都市（危機遺産：2012年～）	イギリス	ii, iii, iv	18世紀三角貿易（UK・US・西インド）拠点港として発展、当時最新技術の <u>棧橋</u> ・ <u>ドック</u> ・ <u>倉庫</u> 建築現存。
52		ヴァールベリ・ラジオ・ステーション →「グリメトン・ラジオ無線局、ヴァールベリ」（2014年：名称変更）	スウェーデン	ii, iv	1924～96稼動した無線通信局（動態保存）。草創期のラジオ局では現存世界唯一、大西洋横断の潜水艦へ送信等に大きな役割を果たす。
53		ドレスデン—エルベ渓谷（危機遺産2006⇒登録抹消2009）	ドイツ	ii, iii, iv, v	ドレスデンと渓谷一帯は19世紀後半から近代工業（造船所・鉄橋・登山電車等＝復元）とバロック混在景観。
53		ピーコ島のブドウ園文化の景観	ポルトガル	iii, v	15世紀ポルトガル人入植とともにブドウ栽培、19世紀末害虫被害も現在なおワイン生産（赤、白、デ・シエイロ）。
54		ルイス・バラガンの邸宅と仕事場（スタジオ）	メキシコ	i, ii	建築家バラガン（1988没）が1948年設計3階建ての自邸。モダニズムと民家に多い土着的要素が調和。
55		王立展示館とカールトン庭園	オーストラリア	ii	メルボルン万博（1880）に建てられた最初のヨーロッパ大陸風建築（ビザンチン、ゴシック、ロマネスク、ロンバルディ、イタリア・ルネサンス様式が混在）—全世界からの産業製品が展示されている—と庭園

56	2005	ハンバーストーンとサンタ・ラウラの硝石工場群（危機遺産：2005年～）	チリ	ii, iii, iv	1880年世界最大硝石鉱脈発見、200以上の工場の企業都市（独特の共同体文化）に発展、現在廃墟。
57		プランタン・モレトゥスの家屋・工房・博物館複合体	ベルギー	ii, iii, iv, vi	1555年印刷出版業を創業したC・プランタンから23代目モレトゥス（1867）まで300年操業の工房は博物館。
58	2006	ジェノヴァ：レ・ストラデー・スオーヴェとパラッツィ・デイ・ロッシ制度	イタリア	ii, iv	16～18世紀後半までに造成の新しい3本の通りは、貴族の高級邸館をロッシ（公的リスト）に登録、迎賓館に。
59		コーンウォールと西デヴォンの鉱山景観	イギリス	ii, iii, iv	銅錫採鉱（1700～1914）し新技術システムの先駆（ブーム・エンジンとエンジン・ハウス）で産業革命の一端を担った地。
60		オマーン：アフラジ灌漑設備	オマーン	v	地下水路利用の灌漑設備約3000うち5つが遺産登録（観測塔・日時計・モスク等含）。起源はBC.2500頃。
61		ビスカヤ橋	スペイン	i, ii	イバイザバル川架橋の鉄製橋（1893完成：全長160m 水面高45m：パラシオ設計）で初のワイヤー吊ゴンドラ運搬式。
62		シーウェル鉱山都市	チリ	ii	2000m 超高地に産銅鉱山会社が建設、19世紀米の町をモデル、最盛期15,000人も1970年代無人に。
63		リュウゼツラン景観と古代テキーラ産業施設群	メキシコ	ii, iv, v, vi	蒸留酒テキーラの原料アガヴェは2000年以上昔からリオ・グランデ渓谷一帯（347km ² ）で栽培（農業）、テキーラ製造は16世紀から現在に至る。
64		ヴロツワフの百周年記念ホール	ポーランド	i, ii, iv	現代技術・建築の先駆的作品（1913年完成、M・ベルク設計）多目的ホールは鉄筋コンクリート建築の記念碑。
65	2007	石見銀山遺跡とその文化的景観	日本	ii, iii, v	銀鉱山遺跡、街道、積出港と港町からなる（範囲4.42km ² ）戦国～1923年閉山の土木・産業・歴史遺産。
66		リドー運河	カナダ	i, iv	オタワとキングストン港（オンタリオ湖）を結ぶ運河。英建設（1832年完成、全長202km、閘門47）欧州技術採用北米最古。
67		シドニー・オペラハウス	オーストラリア	i	1973年竣工（設計ヨルン・ウッツオン、工期6年、16年かかり完成）、現代技術を駆使した20世紀の偉大な建築。
68		ラヴォー地区の葡萄畑	スイス	iii, iv, v	11世紀（カトリック修道会ベネディクト/シトー）から1000年にわたって受継がれたワイン生産；レマン湖沿い文化的景観。
69		ボルドー、リュヌ港	フランス	ii, iv	17世紀半ばから大革命期が絶頂期の中継貿易港。オスマンのパリ改造に100年先んじる都市改造を行った。ワイン・砂糖・コーヒー・奴隷などを蘭諸都市へ（港湾施設）。
70	2008	レーティシュ鉄道アルブラ線・ベルニナ線と周辺の景観	スイス/イタリア	ii, iv	スイスアルプスを横断する山岳鉄道。アルブラ線（1904開通、全長67km）、ベルニナ線（1910、サン・モリッツ～ティラーノ（伊）61km）。
71		スタリー・グラード平原	クロアチア	ii, iii, v	アドリア海フヴァル島にある、紀元前4世紀（古代ギリシア）から2400年続く葡萄とオリーブ生産農業とその景観。
72		ベルリンの近代集合住宅群	ドイツ	ii, iv	B・タウト、M・ヴァーグナー、W・グロピウスらによる革新的住宅供給政策（1910～33年建設）。公共住宅発展に多大影響。
73	2009	シューシュタルの歴史的水利施設	イラン	i, ii, v	紀元前5世紀（ダリウス1世時代）に創設。主要な2運河含み、サラセル城・水利システム操作場・水位測定塔・ため池・水車場等からなる。現在も市に給水。
74		ラ・ショウ・ド・フォン/ル・ロクトル、時計製造の町（ジュラ地方）	スイス	iv	17世紀から19世紀初頭までの、なお現役の住居と仕事場を兼ねた家屋が混在する2本の帯状に並ぶ。地域時計製造（単一工業）文化を反映した開放的な町並み。（マルクス『資本論』に“巨大な工場町”として紹介される。）
75		ポントカサステ水路橋と水路	イギリス	i, ii, iv	ウェールズ北東に位置；運河は全長18km、19世紀初頭に完成した無閘門構造で産業革命土木技術の最高峰。導水路はT・テルフォード作と推察される金属製先駆的事業で全世界へ波及。

産業遺産、世界遺産への道

76		ストックレー邸	ベルギー	i, ii	銀行家で美術収集家 A・ストックレーは、1905年ウィーン分離派運動の先駆的建築家ジョセフ・ホフマンに依頼、1911年完成。幾何学的設計はアールヌーボーの転換点で、アールデコやモダニズムの端緒（建築）となる。
77	2010	タブリーズの歴史的バザール複合体	イラン	ii, iii, iv	歴史的市場複合体はシルクロードの重要な商業中心地の一つであった／ある。13世紀にはすでに繁栄し、サファヴィー朝の首都（16世紀まで）、オスマン朝の勢力拡大により18世紀末まで重要性を維持。商業と文化の最適な融合例。
78		アムステルダムのシゲル運河内の17世紀の環状運河地区	オランダ	i, ii, iv	16世紀末から17世紀初めにかけて建設された港湾都市計画の一区画。同心円状運河システムの間を排水・埋立て都市を拡張する大規模（長期）都市計画—19世紀までモデルとなる一であった。
79		ティエラアデントロの王の道	メキシコ	ii, iv	メキシコシティからニューメキシコ（USA）へ至る2600kmのカミーノ・レアル・デ・ティエラアデントロ（「大地にある王の道」）はサカテカス、グアナファト、ポトシの鉱山から採取された銀やヨーロッパからの水銀の輸送に16世紀半ば～19世紀まで交易路（「銀の道」）として、またスペインとアメリカ先住民との間の多様な交流に利用された。
80	2011	コロンビアのコーヒー産地の文化的景観	コロンビア	v, vi	西部アンデス山脈西側と中央部の麓にある6つの農業景観からなり18の都市を含む。高地狭小な土地で100年も続くコーヒー生産の伝統と厳しい山地環境に適した耕法、スペイン植民地時代の建築が特徴。
81		アルフェルトのファグス工場	ドイツ	ii, iv	W・グロピウス設計の1910年前後に着工された10棟の建築群。靴工場—製造・保管・発送・流通などの製造工程のすべての機能を備え、現在も稼働。バウハウスの先駆け（欧・北米における建築発展過程を示す標識）である。
82	2012	バリ州の文化的景観：トリ・ヒタ・カラナ哲学に基づくスバック灌漑システム	インドネシア	iii, v, vi	水を司る王立寺院タマン・アユン等を含む5つの棚田地域で構成された景観。バリで9世紀から継承の灌漑用水を管理・分配する社会共同体の水利システム「スバック」（古代哲学＝神・人・自然の調和を尊重：民主的で平等な農耕手法）を象徴するもの。
83		水銀関連遺産：アルマデンとイドリア	スペイン／スロベニア	ii, iv	アルマデンは古代、イドリアは中世を起源とする近年まで世界最大であった水銀鉱山。銀の精錬に必要な不可欠な水銀を握ることは世界市場（経済）＝新旧大陸間交易を左右することであった。多数の堅坑の遺構・地上施設を含む。
84		島の経済を表す真珠産業遺産	バーレーン	iii	ベルシャ湾は数千年前から真珠の産地で、伝統産業として2世紀頃から営まれてきた。最盛期（19世紀末から20世紀前半）の富を象徴する住宅・商業建築（養殖棚、店舗、倉庫、モスクなど）17施設。1930年代日本の台頭で衰退。
85		ノール＝バ・デュ・カレー地方の炭田地帯	フランス	ii, iv, vi	ノールとバ・デュ・カレーにまたがる炭田地帯は約120kmにわたって広がる連続性・同質性で注目すべき文化的景観。109の構成資産（18世紀末から20世紀にかけて）からなるよく保存された炭鉱とその都市計画（産業遺構、運河・線路など運輸施設、従業員住宅、宗教施設、学校などコミュニティ関連）の好例。
86		ワロン地方の主要な鉱山遺跡群	ベルギー	ii, iv	19世紀前半から20世紀後半に稼働した炭鉱群（グラン・オルニュ、ボワ・デュ・カジュ、ボワ・デュ・ルック、プレニー・ミーヌ）はベルギーで最も良好に保存され、ヨーロッパの産業革命を象徴する最古の例でもある。地上・地下の両方に多くの技術遺構、産業建築、労働者の寮など炭鉱町の様相を残す。
87	2013	レッドベイのバスク人捕鯨基地	カナダ	iii, iv	カナダ北東部に残る、バスク人の捕鯨基地としては最も古く（16世紀）、全体が良好に保存された伝統的捕鯨の典型例。鯨の解体、鯨油（灯火用、ヨーロッパで販売）の精製・保管が行われた。構成資産は波止場、住居跡、墓地、精製用かまど他、水中の難破船など基地全体＝考古学的構成要素の集合体としての価値が高い。

88		紅河ハニ棚田群の文化的景観	中国	iii, v	雲南省紅河南部に広がる約3000の棚田群でハニ族が1300年かけて切り拓いた。赤米・牛・豚・家鴨・鰻等を飼育する(農業)。
89	2014	オリーブとワインの地—エルサレム南部パティールの文化的景観	パレスチナ	iv, v	古代からオリーブやブドウ生産が盛んで、石積み棚は総延長554kmに及ぶ。現在も壁棚・地下水利用の灌漑システムを使用し生産している(農業)。 [(緊急登録と同時に) 危機遺産2014年～: イスラエルによる分離「壁」建設が景観を破壊]
90		ピエモンテの葡萄畑景観: ランゲ・ロエロ・モンフェッラート	イタリア	iii, v	バローロやバルバレスコ(ワインの銘柄)で知られるピエモンテ州南部の葡萄畑(農業)は素晴らしい文化的景観を形成。
91		ファン・ネレ工場	オランダ	ii, iv	1920年代にロッテルダム近郊に建設された工場(紅茶・コーヒー・タバコを製造)。自然光を取り込むガラス(当時の新技術)のカーテンウォールを採用した工場群は道路・運河・鉄道で繋がりが以後の工場や都市デザインに大きく影響した。
92		中国大運河	中国	i, iii, iv, vi	京杭大運河と呼ばれる総延長2500kmの、黄河と長江:北京と杭州を結ぶ大運河。戦国時代[紀元前4~3世紀]から建設が始まり、特に7世紀(隋の文帝/煬帝)、13世紀(元のフビライ)、17世紀(清の乾隆帝)の増改築・整備がなされ現在も一部使用。
93		富岡製糸場と絹産業遺産群	日本	ii, iv	1872(明治5)年開業の官営工場。フランス製機械と生産システムを導入し世界最高品質の生糸を大量生産して日本の近代化・産業革命をリードした。
94	2015	フォース・ブリッジ	英国	i, iv	1890年に竣工したフォース湾(エンジンバラ)に架かる鉄道トラス橋。カンチレバー(片持ち梁)で全長2.5kmあり、強風・海水浸食に強くなお現役で、その機能美は多くの人を惹きつけている。
95		シャンパーニュの丘陵、メゾンとカーヴ	フランス	iii, iv, vi	スパークリング・ワイン(ボトルの中で二次発酵させる)生産方法が開発(17世紀)・確立されたシャンパーニュ地方3地域の独特の農村工業景観(葡萄畑・ワイナリー・地下貯蔵庫・家屋・市街地など)。
96		ブルゴーニュのブドウ畑	フランス	iii, v	クリマ(葡萄畑の区画)の違い(土壌、気候気温)がワインの色・味・香りの違いを生む。南ディジョンからマランジュまでの50kmにわたって延びるコート・ド・ニュイとボヌの斜面に1247のクリマが広がる。
97		リューカンとノトデンの産業遺産地区	ノルウェー	ii, iv	20世紀初頭、ノルスク・ハイドロ社が建設した水力発電所、送電線、ダム、窒素肥料生産工場、交通システム(鉄道、フェリー)などの一群は、フィヨルド(氷河に削られた谷)の町リューカンと80km離れたノトデンの間に形成された自然景観に調和した産業遺産群である。
98		ハンブルグの倉庫街とチリハウスを含む商館街	ドイツ	iv	エルベ川の島々にあるシュバイヒャー・シュタット(倉庫街)地区と隣接するコントール(商館)地区には15の倉庫ビルとチリハウスを含むオフィスビルがある。いずれも20世紀初頭初期モダニズムの煉瓦造りの統一された外観・機能性を持ち、急増する国際貿易に影響された建築・都市計画を示す。
99		明治日本の産業革命遺産—製鉄・製鋼、造船、石炭産業	日本	ii, iv	西洋から非西洋への産業化・移転の成功を示す一連の産業遺産群で、23の構成資産(28サイト)からなる。製鉄・製鋼、造船、石炭産業=基幹産業・技術を内需・伝統に適合させ短期間で世界有数の産業国家となった世界史上特筆すべきものである。
100		テンプレケ神父の水道橋水利施設	メキシコ	i, ii, iv	フランシスコ会テンプレケ神父が、1555年から17年かけて地元の協力で完成させた。全長48.22km、日干し煉瓦(アドベ)造り+ローマ時代の水道橋/地域の伝統(アドベ)+フランシスコ会の理想が(+)-結んだ顕著な例=アメリカ大陸における水利施設の白眉。

産業遺産、世界遺産への道

101		フライ・ベントスの産業景観	ウルグアイ	ii, iv	ウルグアイ川河岸に広がる食肉加工工場、機械施設（調達・加工・梱包・発送）、港湾施設、居住区、放牧施設・緑地地帯からなる工業団地。1859年肉塩漬けから1865年エキスとコンビーフ、1924年から冷凍肉を製造輸出した。20世紀の欧州・南米間の技術と人びとの交流を示す。
□	2016	第40回世界遺産委員会は7月イスタンブールで開催されたが、クーデターの影響で前半のみで閉幕し、後半は10月パリでの分散開催となった。（以下は2016年7月現在／世界遺産総数は1052となる）。			
102		ル・コルビュジエの建築作品—近代建築運動への顕著な貢献	スイス／日本ほか全7カ国共同	i, ii, vi	日本にある作品は東京上野の「国立西洋美術館」（建築）（建築家 伊東豊雄「世界遺産 コルビュジエ建築の魅力」日本経済新聞2016.07.30夕刊文化欄参照）
103		ベルシアのカナート	イラン	iii, iv	カナートとは山中の地下水脈から田畑や街まで地下水路を引いた水利施設。比較的降水量が多い山地から地下水路で蒸発を防ぐ。11のカナートで構成：最長は全長29km、深さ300mになる。
104		オスカ・ニーマイヤー設計のサン・フランシスコ・デ・アシス教会	ブラジル	i, ii, iv	ペロオリゾンデの人工湖パンプーリャの周囲の一帯の建築群 [教会、カジノ、ヨット・ゴルフクラブ、ボールルームの4件中心]

Fig. 8 番外リスト

[清水／Wiki 他では産業遺産としているが、「科学・技術遺産」として除外したサイト] (2016年9月・種田作表)

S-5	1985	セゴビア旧市街とローマ水道橋	スペイン	i, iii, iv	紀元前1世紀頃建造。全長728mでスペインの水道橋では最大である。〈生活用水は建築含む産業と結びつかない〉
S-6	1985	ポン・デュガール（ローマの水道橋）	フランス	i, iii, iv	紀元前19年頃から6世紀頃まで使用された。全長275m、高さ49mで、50kmの水路の一部。〈生活用水≠産業用水・水利施設〉
*	1995	ハンザ都市ヴィスビュー	スウェーデン	iv, v	ゴットランド島にあるハンザ都市。ヴァイキング時代から建設され、12世紀にはバルト海の商業取引に重要な役割。17の教会、約3.4km、中世の建造物など良好に残っている。〈歴史遺産である〉 (「AllAbout 旅行 世界遺産」: http://allabout.co.jp/gm/gc/431084/ (2016.09.10検索))
*	1996	バレンシアのラ・ロンハ・デ・ラ・セダ	スペイン	i, iv	ラ・ロンハ・デ・ラ・セダ（「組の商品取引所」の意味）は中央市場に面して1482年～1533年に建設されたゴシック建築フランボワイヤン様式の傑作。15～16世紀地中海貿易で繁栄した。〈産業景観と言えるか疑問〉 (「コトバンク 世界遺産詳解」 URL 略 (2016.09.10検索))
*		アムステルダム防壁のディフェンス・ライン	オランダ	ii, iv, v	市街中心部の半径15～20kmを囲む全長135kmの堤防で、45の要塞が配置されている。1883年から1920年に建設され、洪水と敵の侵入を阻止する防衛ライン（戦時）として設計されている。〈軍事は除外〉 (「コトバンク 世界遺産詳解」 URL 略 (2016.09.10検索))
*	1999	ディアマンティーナ歴史地区	ブラジル	ii, iv	18～19世紀（ポルトガル植民地時代）にダイヤモンド鉱山の中心地として投機家・国王代理人らが開拓、バロック様式建築の保存良好。〈宝飾は除外〉 (世界遺産 https://worldheritagesite.xyz/diamantina/ (2016.10.03検索))
S-29	2000	スペインの新石器時代の火打石の鉱山発掘地（モンズ）	ベルギー	i, ii, iv	備考不要〈新石器時代に「産業」を規定することはできないと考える〉 (http://www.ベルギー世界遺産.jp/pages/mons.html (2016.10.02.検索))
*		ヴェガオヤン・ヴェガ群島	ノルウェー	v	約6500以上の島々の数十の島で、漁業／農業とともにアイダーダック飼育（卵と羽毛の採取）で生活していた。飼育場の跡が残存。〈副業も産業だが保留〉 (「世界遺産・検索ページ（インデックス50）」 http://www.tomorrow-01.com/sekaiisan/begao.html (2016.10.01検索))

* 2005	シュトゥルヴェの三角点アーチ	スウェーデン／ほか9か国	ii, iv, vi	シュトゥルヴェの弧とは、ノルウェーのハンメルフェスト岬から黒海まで10か国を貫く、2820km以上にわたる三角測量地点の連なりのこと。1816年～55年、天文学者シュトゥルヴェは史上初めて長距離にわたって1経線を正確に測量した。三角点アーチ観測地点は265の主要な観測点を持つ258か所の主要な観測三角点から成り、登録地には10か国、34か所の観測地点が含まれている。〈非産業で除外〉 〔世界遺産〕： http://whc.unesco.org/ja/list/1187 (2016.09.10検索)；文化庁「世界遺産における産業遺産について」には記載あり
S-46 2006	アプラヴァシ・ガート	モーリシャス	vi	契約を強制された50万人近い「自由」労働者が奴隷の代わりに収容された建物〈「負の遺産」、非産業〉。 〔AllAbout 旅行 世界遺産〕： http://allabout.co.jp/gm/gc/66263/ (2016.09.09検索)
* 2007	ヴィシエグラードのメフメト・パシャ・ソコロヴィッチ橋	ボスニア・ヘルツェゴビナ	ii, iv	橋の名前は建設を命じた大宰相ソコルル・メフメト・パシャに由来する。全長179.5m、11の石組アーチで構成(宮廷建築家ミマル・スイナン設計)されていて、オスマン帝国の技術水準の高さを示す。〈技術、非産業〉 〔ヨーロッパ世界遺産〕 http://www.w-heritage-europa2.info/pages/sokolovicmehmedpasa.html (2016.09.10検索)
* 2010	ジャイプールにあるジャンタール・マンタール	インド	iii, iv	約300年前に建造された天文観測施設。ムガル帝国のマハラジャ、サワーイ・ジャイ・スイン2世の居城に残されている。高精度の20の観測機器をも含まれる。〈科学、非産業〉 (http://www.インド世界遺産.jp/pages/jantarmantar.html (2016.10.02検索))

4. 産業遺産総見

種田一覧表 (Fig. 7) に掲示した“産業”は、第1次～3次産業であり産業建築物も含んでいる。戦争に関連する遺跡、奴隷・強制労働・移民や拉致などの非人道的な歴史遺跡、“いわゆる‘負の遺産’”および軍需・兵器産業の遺産は含めない。古代・中世であっても生業・生活・産業関連は入れ、科学・技術に特化したものは除いた。清水 (Fig. 5 / 2007年現在) のS-46は‘負の遺産’⁽¹¹⁾として Fig. 7からは外し Fig. 8 (番外) に置いている。

クレール (Fig. 4-1 / 1998年)、清水、UNESCO-ICOMOS (注(9) Fig. 9 / 2011年) では‘農業’関連のもの (例えば棚田、酒造／葡萄酒畑、灌漑施設など) が見逃されている。それらは Fig. 7 (私案) の「9-砂糖 (黍) / キューバ 1988、17-棚田 / フィリピン 1995、30-農業と製鉄 / ナイジェリア 1999、31-タバコ / キューバ 1999、33-農業 / スウェーデン 2000、43-ワイン / ポルトガル 2001、46-トカイワイン / ハンガリー 2002、53-ブドウ園 / ポルトガル 2004、63-テキーラ / メキシコ 2006、68-葡萄酒 / スイス 2007、71-葡萄とオリーブ / クロアチア 2008、80-コーヒー / コロンビア 2011」の12カ所にのぼる。

クレール選のサイトの登録基準には、すべてに (iv)⁽¹²⁾が含まれていることが特徴である。しかしながら彼が「リヨンの歴史地区」(Fig. 7-28) を外した理由はわからない。リヨンは、絹産業においては歴史的に見て世界有数の産業都市であったのだからである。

清水にあって UNESCO-ICOMOS リストにないサイトは他に「アフラージュ、オマーンの灌漑システム / オマーン」(Fig. 7-60 / 2006) 「ボルドー、リュヌ港 / フランス」(Fig. 7-69 / 2007) の2件であった。後者は、大西洋の‘奴隷貿易’と関わるため‘負の遺産’になるので UNESCO-ICOMOS リストにないと考えられる。私案では、リバープール (海運・港湾設備を重視して採録) と同じ理由、およびリバープールに比べると‘奴隷貿易’の遺跡がほとんど残存していないことから一覧に採録した。

しかしながら、UNESCO-ICOMOS リストには‘建築 (物)’ も取り上げられていない。クレール・清水も挙げていないのは「ヴァイマルとデッサウのバウハウスとその関連遺産群 / ドイツ」(Fig. 7-21 / 1996) と、離宮の中に‘絹布生産工場’ (当時) が残っている「ガゼルタの18世紀の王宮と公園… / イタリア」(Fig. 7-25 / 1997) の2件である。清水と UNESCO-ICOMOS リストにも挙げられていないのは「建築家ヴィクトール・オルタによる主な邸宅群 (ブリュッセル) / ベルギー」(Fig. 7-34 / 2000)、「ブルノのツゲンドハット邸 / チェコ」(Fig. 7-44 / 2001)、「ヴァル・ディ・

ノートの後期バロック様式の町々／イタリア」(Fig. 7-45/2002)、「バルパライソの海港都市の歴史的街並み／チリ」(Fig. 7-47/2003)、「テル・アビーブのホワイト・シティー近代化運動／イスラエル」(Fig. 7-48/2003)、「ウベダとバエーサのルネサンス様式の記念碑的建造物群／スペイン」(Fig. 7-49/2003)、「ルイス・バラガンの邸宅と仕事場／メキシコ」(Fig. 7-54/2004)、「ジェノヴァ：レ・ストラデー・ヌオーヴェとパラッツィ・デイ・ロツリ制度／イタリア」(Fig. 7-58/2006)、「ヴロツワフの百年記念ホール／ポーランド」(Fig. 7-64/2006)、「シドニー・オペラハウス／オーストラリア」(Fig. 7-67/2007)の10件を数える。

UNESCO-ICOMOS リストの2008年以降2011年まででは「ベルリンの近代集合住宅群・ドイツ」(Fig. 7-72/2008)、「ストックレー邸／ベルギー」(Fig. 7-76/2009)の2件が取り上げられていない。また、番外(Fig. 8)にも考察すべき物件／サイトがあるが、技術史・科学史・建築史からは見るべきもの、歴史遺産ではあるが、生活・生業との関わりが希薄であるので産業遺産には分類しがたい物件／サイト(遺産)である。

産業遺産が世界遺産リストに登録されるには、OUV(顕著な普遍的価値)を証明することやOG(作業指針)に従って調査・審査することだけではない。一つの地域／民族(あるいは文化¹²⁾)に独自・独特であるか、広く他の世界／分野／領域へ影響したか、また2008年以降は“バッファゾーン(緩衝地帯)”と周辺の景観を含めて複数の物件(property)が同一のテーマあるいはストーリーで括るシリアル・ノミネーション¹³⁾、言い換えるならば一連の連続した「(産業)システム」であること、これらの所見も必要条件ではないか、と考えている。

【注記・備考】

- (1) 種田明「産業遺産と産業観光—第16回国際産業遺産保存会議(TICCIH)参加報告—」(『ATOMI 観光コミュニティ学部紀要』Vol. 1/2016, pp. 99~109)
- (2) 種田明「産業遺産研究の歴史・現状・今後—歴史学(社会経済史)の視点から—」(『シンポジウム「日本の技術史を見る眼」第30回産業遺産研究の歴史と現状を考える—講演報告資料集—」中部産業遺産研究会、2012年 pp. 52~64)
- (3) (公社)日本ユネスコ協会連盟[編]『世界遺産 年報』2008(日経ナショナル ジオグラフィック社)~2016(講談社); D・オドルリ／R・スシエ／L・ヴィラール(水嶋英治訳)『世界遺産』白水社【文庫クセジュ】2005他を参照(作成・種田)
- (4) ニジニー・タジール憲章はTICCIHが作成、ICOMOS/UNESCOにより認証された「産業遺産」に関する規定集である(ニジニー・タジールはウラル(ロシア)にある地名)。「産業遺産」「産業考古学」の「(対象となる)歴史的時期」を以下のように規定している(TICCIHのHPから/<http://ticcih.org/about/charter> (2015.03.17検索))

1. Definition of industrial heritage

Industrial heritage consists of the remains of industrial culture which are of historical, technological, social, architectural or scientific value. These remains consist of buildings and machinery, workshops, mills and factories, mines and sites for processing and refining, warehouses and stores, places where energy is generated, transmitted and used, transport and all its infrastructure, as well as places used for social activities related to industry such as housing, religious worship or education.

Industrial archaeology is an interdisciplinary method of studying all the evidence, material and immaterial, of documents, artefacts, stratigraphy and structures, human settlements and natural and urban landscapes, created for or by industrial processes. It makes use of those methods of investigation that are most suitable to increase understanding of the industrial past and present.

The **historical period** of principal interest extends forward from the beginning of the Industrial Revolution in the second half of the eighteenth century up to and including the present day, while also examining its earlier pre-industrial and proto-industrial roots. In addition it draws on the study of work and working techniques encompassed by the history of technology.]

文化審議会では以下に訳出されている：

「…平成15年(2003年)国際産業遺産保存委員会(TICCIH)が採択したニジニー・タジール憲章においては、産業遺産は、「歴史的、技術的、社会的、建築学的、あるいは科学的価値のある産業文化の遺物から成り、それらは建物、機械、工房、工場及び製造所、炭坑及び処理精製所、倉庫や貯蔵庫、エネルギーを製造し、伝達し、消費する場所、輸送とその全てのインフラ、そして住宅、宗教礼拝、教育など産業に関わる社会活動のために使用される場所から成る」とされる。

また、同宣言には、産業考古学について、「産業工程を目的とし、あるいはその結果作られた記録、人工遺物、層序、建造物、人間の居住地、自然景観及び都市景観など、有形、無形の全ての証拠を研究する学際的方法」と定義し、「産業考古学が主として関心を寄せる年代は、18世紀後半における産業革命の開始から現代にまで及び、現代をも含む」と記すとともに、「産業化以前や産業化初期の起源についても調査の対象である」と明記している。…」(「世界遺産における産業遺産について」(文化庁・参考資料1-8 http://www.bunka.go.jp/bunkashingikai/sekaibunkaisan/11/sanko_1_8.html (2015.03.21検索)より)。

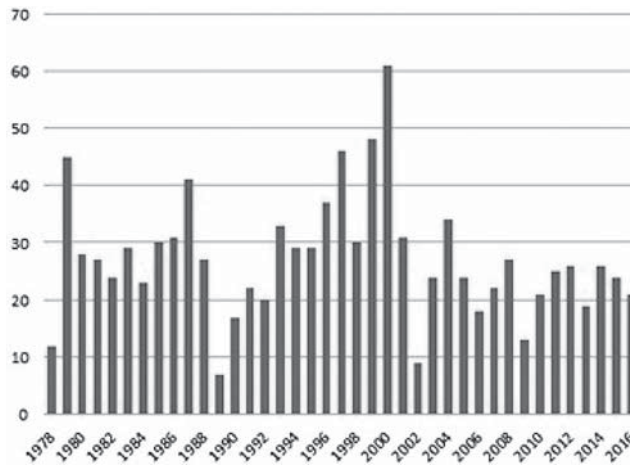
- (5) 人名検索：「Artist DINU BUMBARU」(http://www.festivalphenomena.com/filles/en/select/bio/?id=bumbaru_di (2016.09.06検索))から略訳(種田)した。
- (6) Henry Cleere (1926~) : UCL (University College London)、ヘリテージ・マネジメント [考古~近現代] 教授(現・名誉教授)、

ICOMOS (世界遺産コーディネーター)・考古学会理事・UNIDO プロジェクトリーダー等を歴任。現在 Global Heritage Fund シニア・アドバイザー。(人名検索：http://icahm.icomos.org/bios_cleere.html (2016.09.06検索) より)

- (7) 清水慶一 (1951～2011)：国立科学博物館産業技術史資料情報センター主幹 (当時)、「富岡製糸場」を世界遺産 (2014年リスト登録) にしようと推進・尽力した一人であった。
- (8) 世界遺産登録総数は、D・オドルリ/R・スシエ/L・ヴィラル (水嶋訳) 『世界遺産』白水社、2005 (上記注(3) p.165 「付録3：世界遺産増加数 図と表」より：2003年まで「A」と「世界遺産登録数の推移」(AllAbout 旅行)：<http://allabout.co.jp/gm/gc/375848/> 2016.09.09検索「B」とでは若干の違いがある。「B」の記名者 (世界遺産ガイド 長谷川大) によるキャプション「ただし、世界遺産が合併したり、登録を抹消された世界遺産もあるため、登録数合計=世界遺産総数ではない」(下のグラフのキャプション) が、26年間で15年は違いすぎる。

しかしながら、「合併」・「抹消」を含め世界遺産委員会の審議には諮問機関から「記載」・「情報照会」・「記載延期」・「不記載」の4勧告が、審議にはOUV [評価基準] の理解や解釈・関連条約/用語や指針その他の変更・改正が、常時議論され毎年のように微修正されてきているので、この「違い」は (日仏の著者・個人の) 見解の違いとして許容しうると考える。[なお、現在 ICOMOS では「水中文化遺産条約」(2001年/09年発効)：“海中・水中のサイト (エリア、遺跡・遺物 (産業遺産も含まれる))” について議論が煮詰まりつつあるが、わが国 (未締結) では関係する省庁が多岐にわたるため、次のステップへの動きには慎重な判断が必要 (日本イコモス国内委員会第十五小委員会) としている。ただ、数年先に (水中文化遺産条約批准前に) 批准国の水中遺産が世界遺産に登録された場合、日本ではどう扱われるのか、「違い」が生じる可能性は排除できない。]

世界遺産登録数の推移



世界遺産登録数1978～2016年の推移。ただし、世界遺産が合併したり、登録を抹消された世界遺産もあるため、登録数合計=世界遺産総数ではない。

「A」と「B」の比較 (年の後：左 A・右 B の順—2003年まで；2004～Bのみ)

年	件		年	件		年	件		年	件
1978	12	12	1988	27	27	1998	30	30	2008	27
1979	45	45	1989	7	7	1999	50	48	2009	13
1980	29	28	1990	16	17	2000	64	61	2010	21
1981	24	27	1991	23	22	2001	35	31	2011	25
1982	22	24	1992	23	20	2002	10	9	2012	26
1983	29	29	1993	33	33	2003	26	24	2013	19
1984	23	23	1994	34	29	2004		34	2014	26
1985	30	30	1995	29	29	2005		24	2015	24
1986	30	31	1996	37	37	2006		18	2016	21
1987	39	41	1997	45	46	2007		22		

- (9) 「ICOMOS Technical and industrial heritage in the World Heritage List」出所 http://www.icomos.org/centre_documentation/bib/2011_Industrial%20and%20Technical%20Heritage%20_26-08_complete.pdf (2015.04.02+2016.09.25検索：英仏語併記、PDF 全101ページ・2011年8月編集) —以下に一覧表 (国名 ABC 順) [なお、同リストに記載の文献・資料は省略した]

Fig. 9 ICOMOS /世界遺産リストの中の技術遺産・産業遺産 (2011年8月現在)

オーストラリア	2004	王立展示館とカールトン庭園	(S-37)
オーストリア	1997	ハルシュタットとダッハシュタイン、ザルツカンマーグート	(S-18)
	1998	ゼメリング鉄道	(S-21)
ベルギー	1998	中央運河にかかる4機の水力式リフトとその周辺のラ・ルヴィエール及びル・ルー (エノー)	(S-24)
	2000	スピエンヌの新石器時代の火打石の鉱山発掘地 (モンズ)	(S-29)
	2005	プランタン・モレトゥスの家屋・工房・博物館複合体	(S-40)
ボリビア	1987	ポトシ市街	(S-8)
ボスニア・ヘルツェゴビナ	2007	ヴィシェグラードのメフメト・パシャ・ソコロヴィッチ橋	(Fig.8 番外*)
ブラジル	1980	古都オウロ・ブレト	(S-3)
カナダ	2007	リドー運河	(S-47)
チリ	2005	ハンバーストーンとサンタ・ラウラ硝石工場群	(S-39)
	2006	シーウェル鉱山都市	(S-44)
中国	2000	青城山と都江堰水利(灌漑)施設	(S-28)
キューバ	2000	キューバ南東部のコーヒー農園発祥地の景観	(S-27)
チェコ	1995	クトナー・ホラ: 聖バルバラ教会とセドレツの聖母マリア大聖堂のある歴史都市	(S-23)
フィンランド	1996	ヴェルラ碎木・板紙工場	(S-16)
フランス	1982, 2009	天日製塩施設、サラン・レ・バン大製塩所からアル・ケ・スナン王立製塩所まで	(S-4)
	1985	ポン・デュ・ガール (ローマの水道橋)	(S-6)
	1996	ミディ運河	(S-17)
ドイツ	1992	ランメルスベルク鉱山と古都ゴスラー	(S-10)
	1994	フェルクリンゲン製鉄所	(S-14)
	2001	エッセンのツォルフェライン炭鉱業遺産群	(S-34)
	2011	アルフェルトのファグス工場	(Fig.7 80)
インド	1999, 2005, 2008	インドの山岳鉄道群	(S-25)
	2004	チャトラパティ・シヴァージー・ターミナス駅	(S-35)
	2010	ジャイプールにあるジャンタール・マンタール	(Fig.8 番外*)
イラン	2009	シュシュタルの歴史的水利施設	(Fig.7 73)
イタリア	1995	クレスピ・ダッダ	(S-15)
イタリア／スイス	2008	レーティシュ鉄道アルブラ線・ベルニナ線と周辺の景観	(Fig.7 70)
日本	2007	石見銀山遺跡とその文化的景観	(S-49)
メキシコ	1988	古都グアナフアトとその銀鉱群	(S-9)
	1993	サカテカス歴史地区	(S-13)
	2006	リュウゼツラン景観と古代テキーラ産業施設群	(S-45)
オランダ	1997	キンデルダイク・エルスハウトの風車群	(S-19)
	1998	Ir. D. F. ヴァウダヘマール (D. F. ヴァウダ蒸気水揚げポンプ場)	(S-22)
	2010	アムステルダム シンゲル運河内の17世紀の環状運河地区	(Fig.7 78)
ノルウェー	1980	レーロース鉱山都市	(S-2)
ポーランド	1978	ヴィエリチカ岩塩坑	(S-1)
スロバキア	1993	バンスカー・シュティアヴニツァ [記載は都市名のみ: 種田]	(S-12)
スペイン	1985	セゴビア旧市街とローマ水道橋	(S-5)
	1997	ラス・メドゥラス	(S-20)
	2006	ビスカヤ橋	(S-43)

スウェーデン	1993	エンゲルスベリの製鉄所	(S-11)
	2001	ファールンの大銅山地域	(S-33)
	2004	ヴァールベリ・ラジオ放送局	(S-38)
スイス	2009	ラ・ショウ・ド・フォン／ル・ロクル、時計製造の町	(Fig.7 74)
英国	1986	アイアンブリッジ峡谷	(S-7)
	2000	ブレナボン産業用地（記載は‘景観’）	(S-26)
	2001	ニューラナーク	(S-31)
	2001	ソルテア	(S-32)
	2001	ダーウェント渓谷の工場群	(S-30)
	2004	リヴァプール海商都市	(S-36)
	2006	コーンウォールとウェストデヴォンの鉱山景観	(S-41)
	2009	ポントカサステ水路橋と水路	(Fig.7 75)

※（カッコ内）— “S：清水、Fig.7／Fig.8 番外No.：種田” を参照されたい。

(10) 出所等：基本的には以下の文献・サイトを参照した—

「ICOMOS Technical and industrial heritage in the World Heritage List」（上記注9）

「産業遺産」<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%94%A3%E6%A5%AD%E9%81%BA%E7%94%A3>（2015.04.02検索：「ただし、元々国ごとに何を産業遺産と見なすかは、その国の歴史的経緯などによっても左右される。世界遺産の物件についても、論者によって何を産業遺産に含むかは異なる。」2/15ページ）[番外 Fig.8で Wiki]

「Ask.comの百科事典」各遺産の項目：<http://jp.ask.com/wiki/> 以下略（2015.03.29+05.06検索：基本的に Wiki の記事を凝縮している。）

（公社）日本ユネスコ協会連盟 [編] 『世界遺産 年報』2008（日経ナショナル ジオグラフィック社）～2016（講談社）の該当箇所（速報性があり概略把握に有効である。）・

「AllAbout 旅行 世界遺産」<http://allabout.co.jp/gm/gt/563/>（2016.09.10検索：「世界遺産コンテンツ一覧」—世界遺産ランキング、世界遺産関連ニュース、ヨーロッパの世界遺産、アフリカ・オセアニアの世界遺産、中東の世界遺産、アジアの世界遺産、中国の世界遺産、インドの世界遺産、アメリカの世界遺産、世界遺産とは、世界遺産豆知識、未来の世界遺産、世界遺産関連情報—の各サイトは有用である。）

(11) 稲葉信子「『負の遺産』という言葉から考えること」（『世界遺産 年報2011』（社）日本ユネスコ協会連盟、2011、pp.15-18）が示唆することは深い。

(12) 登録基準の(iv)は「歴史上の重要な段階を物語る建築物、その集合体、科学技術の集合体、あるいは景観を代表する顕著な見本である。」また(iv)は「文化的景観」の典拠の基準でもある。

(13) 梅棹忠夫『二十一世紀の人類像 民族問題をかんがえる』講談社学術文庫、1991年：

「文化というものは、人間精神のなかに組あげられた価値の体系である。そしてその体系は、集団ごとにちがっているものであり、ひとつの集団のなかでは、それを構成する個人によって、おなじ体系が共有されているのである。したがって、文化を研究するということは、価値の体系の研究であり、ひとつの価値体系を共有する集団について、その固有の体系を研究することである。したがって、日本文化の研究とは、日本民族が共有する価値の体系をあきらかにすることである。」（同書 p.34）

(14) シリアル・ノミネーションについては「コトバンク ‘シリアル・ノミネーション’」：

<https://kotobank.jp/word/%E3%82%B7%E3%83%AA%E3%82%A2%E3%83%AB%E3%83%BB%E3%83%8E%E3%83%9F%E3%83%8D%E3%83%BC%E3%82%B7%E3%83%A7%E3%83%B3-1725993>（2016.10.21検索）を参照。

一つのテーマ（登録対象）について、複数の地域／国家に所在するものを一括（ストーリーにして）登録申請する場合を言う。「明治日本の産業革命遺産」、「シルクロード」「ル・コルビュジェ（日本・国立西洋美術館）」などがリスト登録された。